

表紙, 目次, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38549

明治三十九年十月十九日發行

十全會雜誌

第十四號

（非賣品）

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第四十二號目次

○原著及實驗

○北國婦人ノ月經初潮年齢ニ就テ

特別會員 小川勝陳
特別會員 八田智証

○單姿勢不定症(Monothetose)ノ一例

特別會員 松浦龜太郎
特別會員 岩砂鈴次郎

○石川縣羽咋郡菅池地方ニ於ケル奇病調査報告

特別會員 岡本京太郎
外四名

○白点狀網膜炎ノ實例

特別會員 高安右人

○會報

○文部省訓令○醫學科第三年級々會記○醫學科第二年級々會記○第三十七回十全會講話大會○太田友市君逝く

○通信

○飯盛益太郎君通信○全君片信○松原三郎君通信

○會告

○寄贈及交換書目○會費領収

○廣告

○數件

謝辭

本號は六月下旬發行すべき豫定なりしも、會員諸君より寄せられたる玉稿實に豫想外の多きに及び、何れも精の精、粹の粹なるものゝみなれば、空しく之を編輯局裡に葬り去らんも遺憾となし、少々分外の編纂に取りかかり、加ふるに本版の作圖は一層の光彩を添へんとして却つて甚だしき延滞を來したる爲め、旁々發行期日の今日に立ち到りたる所以、乞ふ會員諸君幸に御宥恕あらむことを。

雜誌部委員一同



會報

○文部省訓令第一號

學生生徒ノ本分ハ常ニ健全ナル思想ヲ有シ確實ナル目的ヲ持シ刻苦精勵他日ノ大成ヲ期スルニアルハ固ヨリ言フ俟タズ殊ニ戰後ノ國家ハ將來ノ國民ニ期待スル所益々多ク今日ノ學生生徒タル者ハ其ノ責任一層ノ重キヲ加ヘタルヲ以テ各々學業ヲ勵ミ一意專心其ノ目的ヲ完ウスルノ覺悟ナカルベカラズ

然ルニ近來青年子女ノ間ニ往々意氣銷沈シ風紀頹廢セル傾向アルヲ見ルハ本大臣ノ憂慮ニ堪ヘザル所ナリ現ニ修業中ノ者ニシテ或ハ小成ニ安ジ奢侈ニ流レ或ハ空想ニ煩悶シテ處世ノ本務ヲ閑却スルモノアリ甚シキハ放縱浮薄ニシテ操行ヲ紊リ恬トシテ恥チザル者ナキニアラズ斯ノ如キハ家庭ノ監督其方ヲ誤リ學校ノ規律漸ク弛緩セルノ致ス所ニシテ今ニ於テ嚴ニ戒慎ヲ加フルニアラズンバ禍害ノ及ブ所實ニ測リ知ルベカラズ

社會一部ノ風潮漸ク輕薄ニ流レムトスルノ兆アルニ際シ青年子女ニ對スル誘惑ハ日ニ益々多キヲ加ヘムトス就中近時發刊ノ文書圖書ヲ見ルニ或ハ危激ノ言論ヲ揭

ゲ或ハ厭世ノ思想ヲ説キ或ハ陋劣ノ情態ヲ描キ教育上有害ニシテ斷シテ取ルベカラザルモノ尠シトセズ故ニ學生生徒ノ閱讀スル圖書ハ其内容ヲ精査シ有益ト認ムルモノハ之ヲ勸獎スルト共ニ苟モ不良ノ結果ヲ生ズベキ虞アルモノハ學校ノ内外ヲ問ハズ嚴ニ之ヲ禁遏スルノ方法ヲ取ラザルベカラズ

又頃者極端ナル社會主義ヲ鼓吹スルモノ往々各所ニ出沒シ種々ノ手段ニヨリ教員生徒等ヲ誑惑セムトスル者アリト聞ク若シ夫レ斯ノ如クシテ建國ノ大本ヲ藐視シ社會ノ秩序ヲ紊乱スルガ如キ危險ノ思想教育界ニ傳播シ我教育ノ根柢ヲ動カスニ至ルコトアラバ國家將來ノ爲メ最モ寒心スベキナリ殊ニ教育ニ當ル者宜シク留意戒心シテ矯激ノ僻見ヲ斥ケ流毒ヲ未然ニ防グノ用意ナカルベカラズ

本大臣ハ國運ニ照シ時弊ニ鑑ミ特ニ茲ニ訓示ス教育ノ當局者及ビ學校長教員等ハ克ク本大臣ノ旨ヲ体シ父兄保護者ト協心戮力シテ風紀ヲ振肅シ元氣ヲ作興スルニ努メ學生生徒ハ自ラ修メ己ニ克ク學業ヲ成就スルニ專ニシテ上下胥ヒ率キ以テ教育ノ効果ヲ完ウセムコトヲ期スベシ

明治三十九年六月九日

文部大臣 牧野伸顯

○醫學科第三年級々會記

兩城生

仰いて蒼々たるは天あり、伏して莫々たるは地なり、花笑ひ鳥歌ひ、風舞ひ月踊る、松韻ゆるやかに鼓をうてば白雲たなびくあたり天使の聲あり、吾人は六尺の尊體を以て徒らに九十の春光を恣にし天上天下他に幸福あるものなるを知らず。

時や今、深緑滴るが如く、杜鵑血に啼いて躑躅ために紅なり、吾人は此好機に際して奇抜なる理想的級會を開き、一は以て浩然の氣を養ひ、一は以て我友運動會の振興を圖らんと欲し、百余の級友諸君に詢りて其の讃同を得、此に六月三日を下して一日の清遊を貪れり。いで、余は當日の概況を有の儘に語るむ。

(上) 舟遊

天は清くして一点の雲翳を止めず、吹く風は和にして軽く、地穩にして一塵の起るなし、余は全宿せる季子を誘ひ、親友春山、紫花の両子と相携へて堀川方面に向ふ。定刻淺野川鉄橋に到れば己に集り會せる者數十人。午前八時、先發の二艘は徐ろに艤して纜を解けり、船員凡て十八人。

我が級友の全員は十艘の船に分乗し、午前八時三十分といふに堀川を發す。淺野川はその名の如く水淺くして舟をやるに難く、舟夫の水の中に入りて舟を押すこと數次、亦一興なり。清風水の面をゆるく吹き渡つて面涼しく、小波音なく打寄せ來りて舷を敲く。誰が捨にけむ、鼻緒

(會報)

ちぎれし古下駄の漂へるを後よ送り、解けては集る水の泡の浮べるを前に迎へつ、悠々として川を下る。水は清冽ならずと雖も、河底の砂石を數ふるに足るべく、細鱗の澄澗として餌をあさるなど心地自ら爽かなり。

試みに双眸を放てば、菜畑盡くるあたり、孤村の茅屋三々五々散在し、鷄犬の聲遠く聞えて晝餉たくらん竈の煙、長閑にして靉靄恰も山の帯をなせり。兩岸には青草生ひ茂りて名も知らぬ鳥の聲喧し。風一陣、芦亂れて堤上の人現はる。

水稍深くなるに従ひ、船はますゝ緩かに進めり、詩吟の舟、琵琶歌の舟、快談高笑せる舟、舳艫相啣んで下りゆくさま、宛ら一幅の活畫に似たり。

今や、舟は三ツ屋の堰に到らんとす、水勢急にして飛沫四散、石に激し岩を噛み、般々轟々、乾坤ために震動し、萬象ために狂奔す。舟の落下すること約四尺、水は轟然として恰も水晶簾を掲ぐるが如く、水沫散じて征衣を濡す、爽又快。

前の船は後の船を顧みて其危険を報じ、難關を通過する時、同行一時に手を拍ちて快哉を叫ぶ、勇又壯。

談笑半時にして瀉津村に着し、再び舟筏を備ふて大根布に向ふ。危橋の下を過ぎ、大河端を出づれば廣漠たる平野なり、左右水田には己に早苗の植ゑ付けられて、鶯

空著に輪をなして舞ひ、兩岸には處々芽まだ若き葦生を割葦囀り、小魚飛んで水面に紋を作す。

願れば白山遙かに群山を壓して銀冠をいただき、臥龍山は近く其の廣き胸をむけて我が一行を送るが如く。金城の白聖嚴かに聳れて、鬱蒼たる老松巨柏の間に隠見す。右手には薄る、能州の山々、高く低くほの見えて心地いはん方なく、此處かしこの豆人寸馬の村落に集るさま、其のちらほら見ゆる藁屋瓦屋、まばらに樹林を擁して川に舒び、水に亘りて藪に沿ひ、こゝかしこより立ち昇る白煙など、畫趣いと深きものあり。

心なき舟は、多情多恨なる青年を載せて進み行く、前なるは逃る者の如く、後なるは追ふ者に似たり、一行歡喜、舷を叩いて唱歌に和す。

船は進みて、今や將に河北瀉に入らむとす、淼漫たる河北瀉、激遼たる夏の湖よ、碧波靜かなる所、數多の漁舟、木の葉の如く散在し、白帆は軟風に孕みて此方に来る。噫、壯絶なり夏の湖上、愉快なり河北瀉の半日。船は難なく、根布の濱に着き、茲に一行は船を捨てたり、折しも轟く午砲一發。

(中) 級 會

會場に至れば先發委員の盡力到らざるなく、幽邃なる

小濱神社の境内に、翠綠罩めたる樹の蔭に張られたる校章の幔幕。紅紫の彩旗とどろく、に美を競ひ常磐の綠ゆかしき老松の幹には「式場」と題せる雄大の文字の活躍するあり、質朴にして而かも雅を離れざる所喜ぶべし。

廳て余は口を嗽ぎ手を洗ひ、神殿に詣づ、宮居は白木造にして質素を旨とし、千木鱉木、古代の面影尊さいはん方なく、神靈の氣自ら人に逼り、拜祈時を久うす。

神々しき玉垣の内外に舞ひ狂ふ胡蝶の姿も、社前に遊べる小狗の態もこよなう嬉しげに見ゆ。鍬肩げたる男、白手拭冠れる女、口さがなき漁村の童女など老松の蔭に其の身をよせたるは、正装せる余輩の一行を見惚れてにやあらん、此君なれば春も春ならずといふらん如く、酒に酔を借りて浮かる舟夫の一入元氣なりけるも亦可笑し。あゝ羨しき哉、平和なる漁村。

都の如くいかめしき壯麗の建物や、壯大の橋梁はなきも、清楚にして汚れなき漁家、小川に月を浮ぶる土橋に自ら自然の美趣あり。人車牽牛、雜沓頻繁なる神社佛閣のいかめしさはなきも、古松老杉、鬱乎として生ひ繁れる鎮守の森に若者共の晝休の角力賑はしく、茅葺のお寺に心から善男善女の寄り集ふ盆正月あり。柳容婀娜なる藝女、緑衣紅袴花をかざる女學生はなきも、天真にして飾りなき村娘の祭禮見物に行く姿は、無心の漁夫もふ

り返るらむ。岸うつ波に無限の韻致あり、松ふく風に天樂をさくべし。

春は花、秋は紅葉。あゝ樂しき哉此閑村。

時は來れり、午後一時、第三年級第二次模範的級會は將に開かれんとす。松風颯々として吹き寄するが如き幽妙の中より、君が代の崇高なる調は起れり、一曲又一曲、奏し終りて蓆上に座せば、太田委員開會の辭を述べ。次に級長宮田先生は流暢なる辯をふるはれ、知者樂の事より説き起して、山紫水明の美にうつり、智、仁、勇に及ぼし玉へる一場の説話、人をして慈母の膝下に耳を傾くるの感を懐かしめたり。次で校長高安先生の演説あり、而も懇篤なる訓戒を以てせらる、吾人豈に輕々に聽き過すべけんや。

此に一同團變して各自の行厨を開く。

(下) 余 興

水上運動會

河北瀉に於て舉行せらる。會場は湖畔に設けられ、旭旗翻る處、來賓席あり、學生席あり、發艇準備場ありて整頓こゝに至り盡せり、又沖には小舟の浮べるあり、之れを審判官の詰所ならむ。

湖上波穩かにして、青氈を敷きたるが如く、我が級友

の健兒はけふ晴れの場所、日頃の鉄腕を試みんと意氣軒昂。而も三隻の端艇にて久し振りに花々しく競漕せし有様は、余が拙筆の満足に盡し能はざる所、遺憾千秋。

第一回。高砂、八雲、千歳の三艇に争ひ上る二十一の健兒、さすがは、かねて鍛鍊せる手腕と技倆。いざ示さんは今なりと、相圖の令と共に三艇齊しく波を蹴る、應援の聲、或は岸に或は沖にひびき渡りてクラツチの音勇しく、觀客何れも手に汗を握り、勝敗いかよと見る間に、遂に勝は高砂に歸しぬ。

第二回。更に二十一の健兒進みて艇に乗ずるや、齊しく鉄腕を伸してオールを握れり、殺氣湖面を壓し、觀者撫然たり、スタートは最も公平にして三艇共に湖面を滑るが如く進めり、舵手、漕手、意氣相合して一呼、一漕、艇の進むこと恰も飛ぶが如し。陸上に見るものは或は帽子を振り、或は手を拍ち、歡呼して思ひくくに聲援す、熱視すること暫らくにして二艇に先んずること半艇身、遂に千歳の勝となりぬ。

今左に月桂冠を得たる勇士の芳名を録せん

(第一回) 朝日 額 篤 塚本 白井 鈴木 老川

(第二回) 宮田先生 谷道 鷹見 黒田 高木 小黒 植木

第三回 和艇競漕

時間の都合によりて中止せり、

陸上運動會

會場は小濱神社の裏手にして、青松の間に紅燈彩旗を以て繞らしたる所。樹間に見下ろす河北瀉は青藍を堪ゆるごとく、白帆点々鷗の浮ぶに似たり。

觀れば渺茫たる日本海、白砂路遠くして青松並び茂り、渚に寄する小波の泡沫を散じては美妙の調を齎らし來る。

渺々天に接する蒼海、茫茫限りなき廣野、我が氣をして宏大ならしめ、狂瀟汪洋鞆踏たるは、我が心をして剛壯ならしむ。管絃歌曲の聲なきも漁歌牧笛のわが耳を清くするに足るものあり、漁夫蠶婦の漁る様を見、耕田耘圃の農翁と語るも、亦快ならん。

偶、報あり、之より競技を開始すと。

▲第一回 鉦叩競技

競技者の眼を手拭にて蓋ひ、二十メートルの距離にある鐘を叩くの技なり、嚴重なる委員が指揮の下に勇士交々其技を試む。中には方向を誤つて觀者の列に飛び入るあり、樹木に衝突して眼華閃發をも起したらん如き者あり、棒腹絶倒、喝采の聲山河を動かす。

優等賞を得たるもの

計見醫員 植木 竹内

▲第二、三、四回 提灯競走

(第二回) 一着 黒田 二着 塚本 三着 高木

(第三回) 一着 井上 二着 鈴木 三着 田中
(第四回) 一着 佐藤 二着 谷道 三着 高井

▲第五回 來賓(提灯)競走

一着 近藤副手 二着 宮田先生
三着 高安先生 四着 齊藤醫員

▲第六回 異裝競走

其の名の如く異裝して走るものなり。競技は奇抜にして滑稽、腹をよらせ願を解かしむ、風呂敷包の數個場内に散在す、藏するもの何ぞ、開けて悔しき玉手箱。巡査の服あり、看護婦の服あり、大工あり、女學生あり、紳士あり、下女あり、其着け方の順序は一々認めて包の中に入り、急がざるべからず、然れ共急いで用具を取落すべからず、急いで急ぐべからずとはそれ此れの事なるか。

一着 吉田 二着 遠山 三着 武藤

▲第七、八回 角力

▲第九、十回 腕押

中止せり

かくて楽しき陸上運動會も喝采の中に千秋樂を告げぬ

* * * * *

級友一同更に式場集り、賞品授與式並に茶菓の饗應あり。

級長宮田先生は我が盛大なる級會に對して至當なる公評と満足なる讚辭を賜ひ、太田委員が閉會の辭に次いで後、校長高安先生一步を進めて 兩陛下萬歲、第三年級萬歲を唱へ、一同之に和し、喝采更に起る、時正に四時之より一行は根布の濱より船によりて粟ヶ崎に上陸し此に散會して思ひくの歸路につけり、晚鴉啼を求めて夕月空にいと臆ろなり。

* * * * *

當日の重なる來賓は校長高安先生、級長宮田先生を始め特別會員にては上田先生、小原講師、計見、齊藤の兩醫員、近藤、中野の諸君にして、別けて現代の貴顯なる御身ながらも、質朴清楚ある小舟に満足し給ひて、此行を壯にせられたるは、實に感謝の至に堪えざるなり、茲に委員一同を代表し謹んで其御厚志を謝し奉る。

尚、全會の發起人として、種々斡旋せられたる委員の芳名を録し、以てその勞を多謝す、

藤井一雄、赤尾肇三、谷道清、中村欣一郎(以上撰拔委員)

太田勘市、高野宗重、佐藤武、佐口榮、小黒仁太郎、吉田宗一、

野村義雄(以上幹生)の諸君

○第二年級々會記事

春を飾つた櫻花も既に昨日の夢と過ぎ去りて、新緑滴

らんとする初夏、郊外漸く親むべき頃となつた。此時此際、我第三次の級會が舉行せられんとするのである、しかも最理想的に最新なる方法に於て。

會場は天帝の活眼から見たならば、一個の密柑箱に過ぎない様な濟々堂や、金谷館を以て尙廣しとするが如きは、井底の蛙は愚か、点滴中の細菌と尙擇ぶ所なしと云ふので、議は一決して茲より廣大無限の室を撰む事とした。

五月二十日、號報一發温き殘夢を破るや、素早と床を刎ねのけて雨戸を排すれば、スーッと、射入する光線、眺へた様な空模様、用意もをこく、會場へ向つて、駈足を初めた。

金城市街を足下に瞰下す大乗寺山工兵作業場、一点の雲影もなく、瑠璃のやうに澄み渡つた蒼穹を天井に、青々たる綠草を蔭に、終日の歡をつくさんとするのである。

既に用意も整頓した、松林の間に幕を張りつめて、國旗を飾つて、之をよぎなふ事とした、一寸氣の利いた會場である。満山新緑を以て覆はれ、点々其間を彩るものは時を得顔の山躑躅、恰も刺繡をほどこしたかのやうに。颯と一陣の冷風襟をかすめ去る一刹那、心神、俱に天外に飛躍する感がある。九時開會の鈴が梢を傳ふてひびき亘るや、所々の木蔭草かげより會場目惹けて馳せよつた會員約九十、奏樂につれて恭しく

「君か代」を唱しおはつた。

酒井君 開會の辭

開會の辭は、常に酒井君の專有物である、君例の如く起つて、我級會が夙に智仁勇の三要素を具備する事について述べられた所なご些の遺憾とする事がない、最後に、級長としての上田先生が特に吾人の爲に盡くされた好意に對して深く感謝の辭をのべられた。

上田先生 先生研鑽千金の餘暇粉骨碎身吾人に盡さるゝ慈母もたいならざるに、又更に吾人が前途に對する注意懇々心腑を刺すものあり、吾人只肺肝に銘して其万一にも應ふる能はざるを恐る。

小林唯四郎君

「吾一夕微吟橋上を徜徉す、聲あり、吾を呼ぶものゝ如し、省みれば一漢慇懃吾に云ひけらく、(我人を相するや久し、然れども未だ足下の如き奇相に接せず、足下正しく非凡の兆あり、願くば我に觀相をゆるし玉へ」と吾唯々之をゆるせり」など、昔ばなしにてもあり相な文句をならべて先づ聽者の耳を傾けさせておいて悠然英雄氣取で先生が過去の歴史を英雄的に解釋した御はなし、感珍々々。

伊藤哲一君

勉學の餘暇各國の謎についての研究支那獨乙日本等に

於ける謎の數例を擧げられた、趣味多端糸をくり出す様な所は確に君が雄辯の然らしむる所だ。

小林進君

伊藤君の欠をたぎなふて英語の謎々數例を擧げられた寺田君 寒中休暇、團體旅行山中越の節を最も思白く口演せられた

之れにて一先づ會を中止して後當日の餘興にうつるのだ。其間に當日の大眼目たる肉林の饗あり。

午後一時愈々、大運動會を開催するに到つた、塲の中央には各自より持參した國旗を以て滿艦飾をなし國旗數旋塲の周邊をめぐるして、堂々と運動にとりかゝつた、今其競戯の種類及受賞者の姓名を録して當日の榮譽を彰さん

- 一人一脚 一、服部 四百ヤード 二、副田 二人三脚 二、早川 一、岡崎
- 三、岡崎 三、早川 三、尾崎 三、吉川 三、才田

- 寶拾ひ 一、鈴木 二、小林 三、加藤 四、尾崎 五、久高 一目戲馬 一、萩野 二、山崎 三、蛙競走 一、早川 二、中島 三、服部

- 連脚 一、守部 二、伊藤 職員競走 一、宮田先生 二、中野助手 三、松浦先生 六百ヤード 一、金子 二、宮城 三、副田

其他團體競走角力等あり、十二分の歡をつくして茲に目

出度閉會する事となつた、終りにのみ第二年度の萬歳及び上田先生の萬歳を三唱して歸路につきしは夕陽將に西海に没せんとする頃であつた。

○第三十七回十全會講話大會

正に是れ吾人の口角沫を飛ばして懸河の辯を振ふの好時節、我が十全會講話部は五月十七日午前八時より本校濟々堂に於て大會を開けり。

副會長櫻井教授先づ拍手に迎へられて登壇し開會の辭を告げらるゝや、部長上田教授は「講話會開催に就ての所見」を述べられ殊に辯士の所論を批評するが如き無責任の舉動あるべからず、能く本會の主旨を奉じて部員たるの責任を全ふせられよと望まる。夫れより雄辯交々出で、各得意の論説を吐き、實驗を報告し、標本の供覽をなせるなど、辯士喝采の裡に出没し、舉場にぎよめき時に沈む。

第一席 精神と疾病との關係 中村欣一郎君
精神作用が或る疾病と少からざる關係を有することを説き神經衰弱症に就て氏の所見を述べらる

第二席 虹彩の結核 吉池省吾君
虹彩結核の極めて稀有の疾病なることを述べ、氏が金澤

病院に於て實驗せられたる一例を報告せらる、何れ委細は他日を期して諸君に見ゆるの榮あるべし。

第三席 諸君の前途洋々如春 松浦教授
抑も世の學生多くは「ノイラスチニー」、「メラシコリー」

等となるの傾きあり、一は學問に對する憂慮と一は後來の方針に就てなり、即ち卒業前に取越し苦勞をなすことは大に戒めざるべからず。健康なる精神は健康なる体に宿るの銘言の如く、更に一は學問界の前途に於て益体力の強健を要し、一は應用界に於ける諸君の前途は有望にして決して範圍狭きにあらず、年々卒業する醫學學生の數は大學にて百二十三人、千葉、仙臺、岡山、金澤、長崎等にて四百十人、その他京都、大阪、愛知、熊本、臺灣、及私立醫專校に於て確かならざるも二百五十人位なり、總計約七百五十人が年々輩出し、總計上少くも是丈けは増すといふも、三十六年度の醫士總數は三萬七千八百八十人なり即ち0.75%に10000に1となり、而して實際開業醫士は二千乃至三千人に對して一名の比となれり、此の比はほど正確なれば決して今日の増加恐るゝに足らず、實に洋々如春なり、況んや清韓その他の諸國に於て十分の餘地あるに於てをや、とて最後に同仁會の事に至らる。

第四席 二三の標本説示 小原講師
一は二十四歳の男、肺結核により死したる体より得られ

たるもの、肺動脈の瓣が二つのみなり、即ち瓣は通例のものより大にして位置にも差あり、肺動脈の起根部及縁は著しく大なり、その他瓣の附着せる一部分に内膜炎の症状たる増殖肥厚あり、從來の報告は極僅かにしてヒールの六十二例は他の畸形變症等をも含めり、余は胎生時に於ける畸形のまゝ發達せるものならんと斷定するに吝ならざるなり。

一は七十六歳の男、大動脈及僧帽瓣部の肥厚より右室の部に乳嘴筋より肉柱を生ぜり(通例は腱索あり)、即ち此標本は心筋にて瓣膜に附せるものなりと。

第五席 慢性胃病と舌苔との關係 柴田順三君
胃の疾病と舌苔との關係に就て諸家の説を陳述し、絶對的に關係なしと結論せらる。

第六席 腎臟水腫

宮田 教 授

一言にて云へば尿の經過中故障ありて尿が膀胱に下らず遂に腎臟が擴張す之を腎水腫と稱するなり先天性には輸尿管が閉塞すること、膀胱への開口部の狭きこと、腎盂より出づるとき漏斗狀なるものが鋭角をなし急に上に出で辨の如くなりろの爲に起る、腎動靜脈が經過畸形のため輸尿管の壓迫により起る、副輸尿管の壓迫の爲めに起ることあり、胎生時にミューレル氏管の囊狀に膨脹することあり、かゝる胎兒は分娩後夭死す、その他原因とし

ては尿道の狹窄、高度の包皮、腎臟結石の輸尿管に引懸りて閉鎖すると、膀胱に故障ありて又は癩痕の壓迫により尿が膀胱に入る能はずして起る、又輸尿管が壓迫せらるゝ爲めに又ハ骨盤内の結締織炎の爲めに起る、又輸尿管の疾病例へば新生物殊に乳嘴腫の爲め又は外傷性に例へば腹部を馬に蹴らるゝ時に起る。後天性には遊走腎(多きが如し)、輸尿管が曲り又は折れたる爲めに來る、かゝる時は出沒變化するものにして、ことに間歇性腎臟水腫の名あり。

病解 腎盂中尿壓迫のために壓迫萎縮に陥り遂に腎組織の全く消失することあり而して其内容は始めは尿と粘液となり漸次萎縮すれば液の性質變じて漿液粘液様又は膠様又はコロステアリンの結晶を見るに至り又は壁は破裂し褐色又は綠色となり、恰も血液の如き時は血性腎水腫の名を附し又仮性腎水腫と名くべき場合あり又膿を混ずる時は膿腎水腫と名くることあり。

症候 急性の時は著し然れ共慢性に來る時は著しき症候を呈せず患者自身知らざることあり、大なるに従ふて附近の諸機關を壓迫しことに胃、腸を壓迫する爲め嘔氣、嘈雜、瀉、便秘等起し猶甚しければ背部の疼痛を感ず、その位置は腰部と前外腹壁(肋間の下にて)下に位し遂に横隔膜を壓迫し小骨盤に入り、正中線より反對側に來る

ことは稀なり、硬度は波動あり、猶新しくして。壓迫の強きものは波動不明なり。

豫後 自治することあり、通例は漸次大となり心、肺等を壓迫し胃腸を障害し消化不良に陥らしめ虚脱によりて死し又外傷性のもとは破壊し出血して死することあり。診断 位置及腸胃との關係を知ること必要なり。誤診することとは、肝臓のエセノフックス、囊腫ことに卵巢囊腫等なり、而して試験穿刺は正確ならざること多し、宜しく試験的の切開をなすを可とす即ち背部より切開して必要の準備をなすべし。

療法 膀胱よりのカテーテル夾入法、穿刺術、切開、腎臓の切除法等なり。

以上の講演は教授が二十七歳の男に就て實見せられたる金澤病院外來患者の腎臓水腫液検査を上田教授に托されたる前提として一般に知らしめん婆心に出でられたるものなり。

第七席 全上液の性状等

上田 教授

詳敷は宮田教授の講演の如し、一名水腎とも稱し西洋には稀ならざるが如し然れども我國に於ては比較的少なき様にて余が實見に徴するも果して然らんと思はれしもの二例あるのみ、宮田教授の送られたる液は淡褐煤色、半透明混濁してや、粘調なり振蕩すれば炭酸瓦斯含有のため

泡沫は容易に消えず攝氏十五度にて比重一〇一〇なり、アルカリ性著明にして少しく甘味を有し中に四様の白血球を検出したなり。一、瓣状の大單核を有しヘマトキシリンに染色する細胞なり（此細胞は恐らく Makrofagen ならん）二、小單核細胞 (Makrofagen ならん)。三、細胞中四つ迄の核を有するものあり。四、Eosinophile zellen にして薄く染まれり、エオジン、ゲンチアナヒオレット等にて染めしが不明なり。

Eiweiß と異なる点は一〇 c.c. に二ミリグラムの稀薄アリカリを加ふれば振蕩を待たずして溶く是は殆ど瞬間なり、又五%の食鹽水にも溶く而して液は餘程粘調なり、今之に稀鹽酸の一滴を加ふれば沈澱し、醋酸を一滴加ふるも亦全様の沈澱を見る。かゝるものは何なりやといふに恐らくは類粘液素 Pseud mucin なるべしとて分拆表を掲げ仔細に研究の結果を報告されたり。

第八席 Akromegalie

林 篤君

本病は一八八六年佛國 Marie 氏の發見せる所、ロンブロド氏の大骨症の名の下に報告し、或は巨大發育症としての報告もありと。夫れより海外及び本邦に於ける報告の數を擧げ、次で本病の原因、症狀等遺憾なく講演せられ、終りに氏は患者を供覽せしめ、充分なる説明の勞をとつて局を結び玉ひぬ。

第九席 外科的實驗の數例 東 良 平 君

一 Tetanus の六例 氏が金澤病院に二例、日露戰役に二例、自宅開業中に二例を得られたる有益なる實驗談なり。

二 下脚に於ける瘻管一例 親しく手を下し給へる實例につき詳述せられたり。

第十席 Piedra 中西 島 吉 君

本病の病歴 症候、原因に就て洩れなく陳述せらる

第十一席 スピロヘーテ、バルリダ。

須貝 璋 太郎 君

二%のホスホールフクシンにより染色したるものを供覽せらる。

第十二席 顔面神經の侵襲を蒙りたる筋病性進行筋肉萎縮の脊髓に於ける病理解剖的見聞

小 原 講 師

本校病理教室に於て親しく研究せられ、大に獲るところありて講演されたるものなるが、詳細は本誌に乞ふて次號の光彩を添ふこと、せん

第十三席 初生兒の生死産鑑定に就て

村 上 教 授

先づ生産か死産か、もし生産とすれば如何なることによりて死せしや、その時候の他種々の關係上、生産にし

ても死産の如き場合あるを以て、かゝる場合よりは十分探究して破格の場合も思はざるべからずとて教授が實見例を就て諄々演ぜられ、綿密なる視察を要すとして懇々注意を加へられたり。

第十四席 畸形胎兒の供覽 小 川 教 授

福井市開業醫波々伯部繁政君の寄贈にかゝる腹部臟器の殆ど全部露出せる胎兒の一例に就て供覽せられ。猶後來かゝる稀有の標本に接したる場合には本校に寄贈ありたしとて降壇せられ全君の厚意を謝せらる。

第十五席 乳兒脚氣診斷 岡 本 京 太郎 君

氏が實見せられたる、數例に就て述べられたり。

第十六席 股ヘルニアの根治的療法

木 村 博 士

余も本會々員の一人なるが大坂に趣きて三年、未だ何等の失策もなく現職にあるは自ら欣ぶと全時に諸君の後援あるに依るもの茲に深く謝する所以なりとて謙遜の辭を述べられ、さて股ヘルニアに就ては本日何等の「リテラツール」を有せず然れ共鼠蹊ヘルニアは非常に多きに反し股ヘルニアの余の二十餘年來の實驗によれば少なくとも日本よりは稀なるが如し即ち金澤にて二人見たるのみ、然るに今より約一ヶ月程前大坂醫學校外來に一人の女が來り股ヘルニアに他ならずと診斷し手術せんとする時、又

全時に全患者と診断すべき一人の老婆が來れり依て是にも入院を勧め多分昨今入院せるならんと存ず、茲には前患者に就ての實見を述べん。

抑も股ヘルニアの比較的婦人に多きといふはプーバルト氏靱帶、骨盤等の關係により男とは差ある所以なり然れ共余は茲に想像を云ひ得るのみ、ことに日本の婦人は帶、下紐、腰卷等グル／＼七ツも締め、外國婦人はコルセツトを締む、かゝる点も差あるを以て或は日本婦人には少なきならんか。

一般ヘルニアの根治的手術は危険なし、總じて余の考によれば内方より出でしものは内方より閉づるを可とす。今日迄の處は多く「バツシー」の法を用ひ僅かに「コツヘル」の法を用ひたり、又元は大人に行ひしが手術の危険少なきを以て少數大なる小供にも行ひ得、余は滿二歳迄は勧めず、三歳に至ればや、勧め、五歳に至れば是非にと勧め、十歳に至れば全く危険なしとて勧め、一般にヘルニアの嚢を剝離す、尿管等も愈着あれば嚢より剝離し精系も毀くるなくして剝離せざるべからず、然らずんば爲めに罌丸の營養障害等を起すこと少なからざるべし、ろの他凡ての危険なる方法は改めざるべからず、而して内方より閉づるを可とす、もし嚢水腫起れば強て剝離するのみ、唯少數面倒なり、然れ共根治的の事に就ては最

も然らん、此事に就ては余は一昨年大坂の雜誌にも書けり、而して余の實驗は卵大以下なり即ちプーバルト氏靱帶の上にて切開し脂肪下迄出し、もしヘルニア頸が愈着すれば腹腔の様子を伺ひ全く他に愈着なき時始めて鎖すなり、時としては切開すれば嚢を見る能はざることあれば細心注意せざるべからず、嚢内の膜は恰も心臓の内面の如し更に腹壁を切りプーバルト氏靱帶の一部を外側に切り縫ひ付く然れば尿管の間隙が残るため靜脈の鬱積を來す恐れあり故に耻骨に縫合し見たり。而して余は從來の方法は一も首肯し得るものなきを以て自ら大膽にも以上の方法を考案せしなり、然れ共余は深く自信を有す。とて終始嘶嗷せる音聲を勵精せられ、ろの熱心なる聽者をして一驚せしむるばかりなりき、かくて拍子大掲載の下に降壇せらる。

第十七席 下顎嚢腫の一例 山本長助君

下顎嚢腫の症狀、診断より氏の實驗例を遺憾なく述べられたり

第十八席 肋膜内皮細胞腫の觀察 島田吉二郎君

先づ組織學上の説明より、本病の甚だ稀有なること（一八九七年末の調査によれば外國に十八例、本邦に五例あるのみ）並に本病の學說を陳述せられ、氏は之を第一、第二、第三の病變に分ちて發生上の觀察に及び、結局肋

膜内皮細胞腫は眞性の腫瘍なりと断定せらる。

第十九席 再發角膜實質炎 加藤慶三君

屢々目撃する所にして六歳—二十歳の女兒に胃され易く、原因は先天性梅毒、腺病、癩麻質斯等なりと。之より氏は六歳の女兒に實驗せられたる臨床上の報告を洩れなく語られたり。

第二十席 肺、心臟の護膜腫 近藤勇記君

氏は簡單に而かも叮嚀に護膜腫の病理を説き、有益なる標本を供覽せらる。

第二十一席 宗教の必要 若槻寛隆君

能辯にして莊重なる態度、尙聲音の抑揚其宜しきを得て、氣概言語の外に溢る。

第二十二席 中甲介に生ぜる骨腫

村山常三郎君

本腫瘍發生の原因に就て諸家の説を述べ、其のポリプ及び肥厚性鼻炎との鑑別に就て詳しく語られたり。

第二十三席 人体と氣候との關係 佐口榮君

氏が得意の獨逸語を以て論ぜられたること本題の如し

第二十三席 水泡性結膜炎の治療に就て

奈良八郎君

通常用ふるは蒸氣性甘素なれども氏は他の一法として5%の古加乙溼を点眼し、麻痺の來りたる後カルボールを

半筒注射すれば一時は浮腫するも、繃帶する時は數時間にして効を奏すと

第二十四席 涕泣の觀察 高野宗重君

悠々壇上に現はれたる輕快なる風采の一士、徐ろにコップに水を注ぎながら「涕泣」の字義を解釋し次で生理的觀察の形象的、音聲的、色彩的の三段に區別して講演せらる、所、滑稽輕妙、思はず聽者をして哄笑せしめたり、いかに氏が觀察眼の鋭なることよ

第二十五席 閉會の辭 上田 教授

○太田友市君逝く 生はこれ寄、死はこれ歸、老少不定は浮世の常といふもの、天道是か非か、年未だ壯ならず、業半なる此君に壽をかさざるとは、噫悲しい哉。君は長崎縣の人、夙に郷關を辭して我校に學び、去る三十六年十一月其業を卒へられ、金澤病院眼科醫員として勤務中、一年志願兵に合格し、入隊後程なく陸軍三等軍醫として征露の役に従ひ、偉功赫々、昨年四月目出度郷里に凱旋せられ、爾來研學大に爲すあらんとせしも、一朝病痾の襲ふ所となりしかば、去りて故山に靜養せしも病勢日に危篤に陥り遂に七月二十一日空しく前途多望の形骸を留めて幽冥の境に旅立たれぬ、噫悲しい哉。

通 信

○飯森益太郎君通信

(五月五日民賢發)
(富田教授宛)

拜啓益々御清祥奉賀候貴諭により何か通信致度考の處
元來筆不精の某不計延引致し候段幾重にも御容赦被下
度候頃者小閑を得クダラヌ事二三御報知申上候間若し
會誌にも御掲載被下候は、偏に御斧正相成度候敬具

民賢にて 飯 森 生

民賢雜信

飯 森 生

▲獨乙に於ける日本留學生が如何に生活し如何に研學し
つゝあるかを知るは將來留學を企圖する人の爲め多少參
考になる事と思ふから左に其二三を報告する事とした
▲先づ獨乙へ着したら我々醫學者は第一に大學へ入學す
る手續をせねばならない夫れには日本公使館の證明書が
必要だそこで一寸『私儀今度醫科大學へ入學致度候に付
別紙履歷書差上候間右御證明相成度候也』と云ふ様な願
書を出すと四五日の後獨乙文の履歷證明書が下附になる

夫れに自分の旅行券と入學料二十マークを添へて大學の
事務所へ申出れば三四日の中に入學が許され「レギチマ
チオンス、カルテ」を受くる事が出来るのだ尤も入學は
學期開始後一ヶ月位迄は差支ないとの話だ

▲公使館では中學を卒業し内務省開業免狀を所持する者
には何時でも證明して呉れるが何分外國の事だから怪し
い人物と見れば容易に證明書を下附せぬ場合もあるらし
い

▲大學へ入學の手續が濟んだら學科の撰擇が必要だ外國
の留學者には何科でも隨意だから畢竟自分の専門に依り
一科でも乃至五六科でも好きな程取ればよい聽講料は一
科が三十マーク乃至四十マークの間である

▲初に一寸決意せねばならぬのは日本で獨乙語をやつた
人でも獨乙人の云ふ事は中々分らないうことで初めに講義
物を取ても一向面白くないから學科の撰擇は耳の學問よ
り目の學問の方を取るのが肝腎だ

▲獨乙へ來て誰でも一番困るのは語學である日本て大の
獨乙學者を氣取り鼻を高くして居る者でも最初は丸で語
學的聾啞者である習ふより慣れと云ふ諺の如く先づ半年
許立たねば一人前になれない

▲だから獨乙へ着すると第一に必要なのは語學教師であ
る幸ひ當地には澤山の男若しくは女の教師があるから撰

取見取一時間「マーク」乃至、「マーク」五十「ペンニー」と云ふが普通の相場である

▲余は余の經驗上語學の練習が極めて必要である事を感じたから他日留學でもしようと思ふ人には少なくとも半年許内地で獨乙人に就き會話の下稽古をする事を切に勧告する

▲當地大學の本部は「ルートウツヒ」町と云ふ市の東端にあるが醫科の方は中央停車場より程遠からぬ「ペッテンコーファ」町「ヌスバウム」町に散在してある其建物は日本の割合から云ふと差して驚く程でもないが内部の構造器械の設備書籍の多數なるには成程獨乙だと感服する程である

▲獨乙では大學の数が二十五ヶ所學生が六萬餘と云ふ話だか民賢には醫科のみで千三四百位居る多くは他地方の人で當地在籍者は少ない様だ一体獨乙學生の多數は一學期毎々各大學を巡歴して一所に永く留ると云ふ事は稀な方だ

▲學生には別に制服と云ふ者もなくモーニングか或は背廣を着し多くは髭を貯へ風彩が中々立派だから一見した處では教授か學生か分らぬ程である學生の中には女も居る併し御多分には漏れず美人は少い方だ先づ万緑叢中紅一点とも云ふべしだ

▲學生の生活費は獨乙人では月百二十三「マーク」位で濟むと云ふ話だが日本人には月二百「マーク」では少々肩が痛い授業料や参考書や雜費を合算すれば二百六十「マーク」はケチにやつても是非必要だ其一例は小生か月々下宿屋へ支拂ふ金高は室代四十二「マーク」(「コーヒ」二杯ブロー二個の朝食附)晝と夕食が各一「マーク」宛其点燈料「ハイツング」洗濯物等でザット百五十「マーク」になる跡百「マーク」計が小遣や授業料等の平均額だ他國に居ると兎角入る者は金!

▲民賢醫科大學の教師はプロフェッスル四十二名プリファードトウェント三十三名居る此人々が各専門科に就き皆講義や「クルス」を擔當して居る其中に有名な人々は Dr. Voit (生理) Dr. Winkel (産婦) Dr. Bollinger, Dink (病) Everschunsel (眼) Kraepelin (婦) Dr. Bauer, Müller (内) Dr. Angerer (外) Dr. Gruber (齒) Dr. Tappiner (藥) Ruokert (解) Mollier (胎) Emmerich (衛) Roselt (皮膚) Beizold (耳) Seitz (小) Rieder (齒) 等諸氏と其他は所謂陣笠連だが此中には將來頭角を現す人も不尠との評判である

▲民賢には此頃伯林に次で多數の留學生が居る毎日曜には日本人會があつて「レストラン」で會食する事に定てある其人々は藤井健治郎(文)唐木保藏(婦)宮田哲雄(外)門

脇章甫(内)新藤北三(内)三浦新七(商)宮原武熊(眼)二木謙三(菌)大場茂馬(法)長岡(農)鶴見助(眼)岡本正喜(外)西村(外)佐々木達(菌)速水(同)中井長三郎(財)の諸氏と小生と都合十六人である

▲以上の人々の内佐々木、速水、二木、長岡、藤井の五氏を除き他は皆ドクトル試験を受くる筈で勉強して居るが此三四年前迄は該試験も容易で僅か内外解の三科だつたうたが現今は内、外、産、解、生、病、衛の七科を受ければならぬ之れが日本語でやるならそう六ヶ敷もないが獨乙語でバラ／＼喋らねばならぬから中々大役さ

▲ドクトル、エキザメを受くる資格は醫術開業免狀所有者には入學後一「セメスター」を経過すればよいのだが併し従來の受験者は言語の關係上大抵三―四學期目に受くるが多い様だ當地で「ドクトル」に成た人は殆んど二十人もあるさうだ

▲「ドクトル」受験には先づ教授より「アーマー」を受けて論文 (Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde in der Medizin) を掲出せねばならぬ問題の難易にも困るが之れのみにも一寸三四ヶ月はかゝる此「ジセルタチオン」が甘く通過すると之れを百部斗印刷に附し受験料四百五十「マーク」(獨乙人は三百「マーク」)を添へて試験を願出するのである

▲試験の方法は別段内地と異なつた事はないが外國人には比較的容易な様に聞て居る併し是迄の受験者中落第の不幸に遭遇した人も少なくない若し落第する時は更に二百五十「マーク」を追加して三ヶ月後に再試験を受ける規定である

▲試験の評点は *Sehngut, Gut, Genügend, Ungenügend* の四ツに別れて居る若し *Ungenügend* を頂戴すると落第の不面目を來すのだ

▲一体獨乙で「ドクトル、エキザメ」を受くるのは我々には寔に馬鹿げた話で其準備に一年は費さねばならぬ能く考ふれば此時間を自分の専門へ利用した方が餘程得策だが日本では未々「ドクトル」と云ふ看板がさくから誰でも一苦勞するのだ

▲話は別だが目下余の下宿には佐々木學士初め六人の留學生が居る食事の時食堂へ寄ると矢鱈に日本語を喋り時問を消費するから日曜日の他は獨乙語でなければ話をする事が出来ぬ規則を設けてある若し之れを犯す者は一回五ペンニツヒ宛の罰金よ科せらるゝのだ余興として夫を一ツ御覽に入れよう

1. Wir schwören zur Übung der deutschen Sprache statt der Japanischen Ausdrücke stets deutsche zu gebrauchen.

Wahr das Gesetz verletzt, muss 5 Pfennig bezahlen.

2. Im Falle, dass man etwas mit bestem willen nicht deutsch wiedergeben kann, darf man mit Erlaubniss des Gesellschafsgliedes Japanisch sprechen.

3. Am Sonntag u. in der Zeit nach dem Abendessen am Samstag darf man sich in Japanischer Sprache unterhalten.

4. Der Wewalter, welcher wachentlich unter uns wechselt, muss die strafgelder einziehen und von denselben den von uns bestimmten Gebrauch machen.

即ち罰金は日曜日に菓子を食ふ資金と成るのだ余の如きは思はず不識日本語を喋て取られた錢が「マーク」許にもなるだろうよ

○飯森益太郎君片信

一

(前略)職業に忠實なるべきことは醫師としての本分には相違なきも背は腹に換へられずと申す諺も有之候間何とか少しく身体の休まる様御具風有之様切に御勸告申上候小生は不相變無事遊び片手に勉強致居候間御休被下度

候

一昨日近藤博士來民二三日中に南獨逸を巡遊して巴里倫敦へ赴かれ候に付小生も此頃春季休業故同行可致かと考中に有之候兄の手紙は當地着以來二通しか參らず甚た心細く感居候間セメテハ一ヶ月二三度位御出し被下度候

(中畧)氣候は二三日迄春暖の候に候ひしも昨今は又々降雪寒氣甚しく候

佐々木學士來學期より當地へ來る旨報知有之候不相變故郷の様を面白き事無之只細腰大臂の獨逸婦人が眼底に映するのみに有之候

三月十四日

民賢にて

二

昨日旅行先より歸りました前後二十一日間諸方をノタクリ廻り中々面白きことでしたが大に疲れました伯林では佐々木氏に面會し大に歡迎せられました氏は中々の通人にて言語も充分出來非常に勉強して居られます此二十日より小生の下宿へ參られ一ゼメスター丈滞在せられます(バクテリオロジー)此頃敷波氏と同行にて三人、近日女醫一名來民の筈です兄も一奮發一二年間來遊してはドラス中々年を取つた人子供の澤山ある人が來て居ますよ

四月十三日

(以上森島彦夫君宛)

三

詳細の御通信甚だ面白く讀了致しました這般の通信は予の最も歡迎する處決して辭儀は致しませんから續々御投簡あらんことを乞ふ去月三十日敷波氏來民予の室にて六日間滞在せられしも折悪く予は巴里倫敦旅行中にて面會するを得ず甚た遺憾に思ひました伯林にては佐々木學士に面會致しました氏は來二十日より民顯へ來らるゝ筈です目下當大學はフェリエン中にて毎日プラ／＼遊て居ります來十八日より當地に内科學會有之國內有名の學者が蝟集し各大氣焔を吐くそうです(中畧)此頃は獨逸もメッキリ暖くなりましたが日本ならば花見と云ふ奴で大に浮かれる處なれども夫れも出來ず遙に東の一角を覗んで澁と云ふが落位のことです此圖は有名なるウィースハーデンのクルスハウスです西洋の溫泉は日本と違ひ沐浴することなく只毎朝此處に來りガブ／＼呑む斗です

四月十三日

四

伊勢發の芳墨只今落手生の爲成功を祈り被下候由而も本尊は暗愚爲すなく只獨逸の南端に碌々として日を送り申候

佐々木學士先日來着同宿折々の故郷談に旅情を慰め居申候同氏は目下ブルーバ氏の下に黴菌學を研究せられ頗る熱心よて着歐以來既に三四の大なるアルバイトを有せらるゝとの事に御座候來月下旬には當地を出發せらるゝ豫定とのことに候

五月十八日

飯 森 生

bei Hillenbrand

Mozartstr. 9 II.

München

Deutschland.

(以上八田智証君宛)

○松原三郎氏片信

一

明治三十九年を迎へ御健康を祝す

小生は去八月より研究所の一員となり他の同僚助手と共に病院内の醫員宿舍に起居致居候

小生の居る病院は狂者四千二三百人あり世界人種の展覽會様のものにて獨人殊に多く診察も獨佛語を要すること甚た多し一二の日本人患者もあり建物無數にて一寸した町をなす男病院女病院研究所は全く獨立し從て三ヶ所に

(會告)

クリニクあり

此他よも數多の紐育府立精神病院ありて二万五千人以上の狂者を施療し毎年一千万圓以上を支出す其制度の大なること世界第一なり醫員看護婦等も各國人混合し隨分面白し

氣候は金澤よりも寒暑共に強し併し生活の贅澤なる爲め苦しきこと無し

正月

紐育にて

二

益御健全にて伊勢廟御參拜の由出雲の神様の御示も既に御必要あること存ぜられ候(中畧)小生は相變らず瓦全多忙に勉學する譯でもないが例によりて諸兄へ卸無沙汰のみで.....宜敷御傳被下度候

本月一日より一週間斗り櫻と梅と桃と一時に咲き申候
五月十五日 地球の裏より 三 郎

Pathological Institute.

Ward's Island,

New York city,

America.

(以上八田君宛)

會告

○寄贈及交換書目

(九月三十日迄領取ノ分)

東京醫學會雜誌	二〇ノ一〇、二、三、四、五、六、八	全	會
中外醫事新報	六、八、九、三〇、三二、三三、四、五、六	全	社
鎮西醫報	九、一〇、	全	社
衛生談話	六ノ五、六、七	全	會
國家醫學會雜誌	三九、三〇、三二、三三	全	會
東京醫事新誌	一、二、三、四、五、六、七、八、九、七〇	全	局
軍醫學會雜誌	一、五、三、四、五、	全	會
日本醫事週報	五、六、七、八、九、一〇、三二、三三、四、	全	社
醫海時報	六、三、三、四、五、六、七、八、九、一〇、	全	社
藥石新報	五、七、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、二、三、四、	全	社
大日本私立衛生會雜誌	二、七、六、八、九、	全	會
藥學雜誌	二、九、二、三、四、五、	全	會
藝備醫事	二、〇、一、二、三、四、	全	會
助産之衆	二、〇、一、二、三、四、	全	會
廣島衛生醫事月報	八、九、一〇、一、二、三、	全	社
醫事新聞	七、〇、一、三、四、五、六、七、	全	社
岡山醫學會雜誌	一、九、五、六、七、八、九、	全	會

(會告)

增訂藥物學提綱 一部
七版病理學 一冊

血液解剖學講本 一冊

新纂外科總論 前編 一冊
下卷 一冊

內經素問 自卷一五 二冊
至卷一八

西醫日用方 天地二冊

古方選 一冊

校外十全會費納付調書

金額 期 限

金參圓	(自三十九年度至四十一年度)	三ヶ年分
金參圓	(全)	上
金壹圓	(三十八年度)	上
金參圓	(自三十一年度至三十三年度)	三ヶ年分
金五圓	(自三十五年度至三十七年度)	五ヶ年分
金參圓	(自三十七年度至三十九年度)	三ヶ年分
金參圓	(自三十七年度至三十九年度)	三ヶ年分
金四圓	(自三十七年度至三十九年度)	六ヶ年分
金參圓	(自三十九年度至四十一年度)	三ヶ年分
金參圓	(自三十九年度至四十一年度)	三ヶ年分

全	金子教授洋行紀念 シテ有志一同ヨリ	上
全	下平用彩君	上
全	中野鑄太郎君	上
全	上	上

氏名

戶谷慈一君
城石健治君
影山清美君
安田則人君
杉部多米吉君
橋本喜久三君
東良平君
小西俊三君
辻本辰之助君
山本幸吉君
塚原千津馬君

金參圓	(全)	上
金參圓	(全)	上
金參圓	(自三十八年度至四十二年度)	五ヶ年分
金參圓	(自三十九年度至四十一年度)	三ヶ年分
金參圓	(全)	上
金參圓	(自三十八年度至四十二年度)	五ヶ年分
金參圓	(自三十九年度至四十一年度)	三ヶ年分
金參圓	(自三十九年度至四十一年度)	三ヶ年分
金參圓	(自三十九年度至四十一年度)	三ヶ年分
金壹圓	(三十九年度)	上

以上

刀禰有恒君
江藤幹君
崎達郎君
眞田幸平君
眞澤貞一君
宮井勇君
瓜生尹重君
田代保二君
土田久三郎君
龍田恭齊君
大橋豐君
宮川薰君
丸谷熊次郎君
洲崎歸一君
近藤琢磨君
菅野萬平君
橋佐内君

樵叟歸來小徑通
貪看秋景倚筇立

滿林如染豔丹楓
人在攀川詩句中

雨城

○本誌第三十五號より第四十二號に至る余が筆を執りし總ての記事中誤字、脱字、衍字等甚多し、一は余が校正の粗漏によること一は活字子の謬撰による、觀者爲めに意を酌むにたゞざるもの多かりしならんか、茲に任を終へ筆を擱くに當り一言附記して其責任を明かにし併せて全會員諸賢に謝す。

(鈞 雪 生)

廣 告

故太田友市君在學紀念ノ爲メ書籍ヲ十全會ニ寄贈致シ度候ニ付有志ノ諸君ハ應分ノ御出金ヲ乞フ

一 醜金額及ビ姓名ハ十全會雜誌ニ廣告ス
ル外別ニ受領証ヲ呈セズ

一 醜金額切ハ明治三十九年十月二十日ト
相定メ申候

一 醜金額ハ金澤病院内笠雋吉郎堀田圭三
兩名ノ内へ御通知又ハ御拂込被下度候

明治三十九年九月 月原秀範
發起人 堀田圭三

笠 雋吉郎

○醫學博士鈴木文太郎君

肖像寄付金受領高

受領月日	金額	氏名
二月十四日	參拾參錢	田代保二君
同 十九日	參拾錢	高澤清松君
同	參拾錢	飯森益太郎君
六月十三日	拾錢	杉内泰治君
同	拾錢	尾崎建雄君
同 二十三日	貳拾錢	浦晴二君
同	拾錢	小木秀時君
同 二十七日	拾錢	西原愛太郎君
同 二十八日	貳拾錢	杉山貞二君
同	貳拾錢	辻野倭次郎君
同	貳拾錢	吉田隆二君
同	拾錢	佐藤郷治郎君
同	拾錢	飯田豐君
同	拾錢	田中精一君
同	拾錢	安澤綱三君
同	拾錢	吉井勝次君
同	拾錢	木下倉太郎君
同	拾錢	本間淳三君
同	拾錢	六月廿八日
同	拾錢	佐々木龜六君
同	拾錢	山口登君
同	拾錢	伊藤善次君
同	拾錢	石川精一君
同	拾錢	小野澤庄桂君
同	五錢	吉野積三君
同	五錢	上遠野與作君
同	五錢	佐々木茂樹君
同	五錢	密山総民君
同	拾錢	山本直枝君
同	拾錢	片山馨君
同	拾錢	久津明一君
同	拾錢	大井藤治郎君
同 七月三日	拾錢	相馬甲五郎君
同 七月六日	拾錢	田中三彌君
同	五錢	吉川友信君
同	五錢	中川善松君
同	五錢	名取博三君
同	五錢	服部暢助君
同	五錢	小田善壽君
同	五錢	久高唯忠君
同	五錢	太田得郎君

毎土曜

日發行

東京醫事新誌

明治拾年創刊

一冊價金拾錢

郵税金五厘

本誌ハ原著及實驗▲内外臨床講義▲内外抄録▲叢談▲雜纂▲譯纂▲論議▲寄書▲史傳▲新藥▲會報▲官報▲雜報
ノ諸欄アリテ内外ノ治療新報及時事ヲ急速ニ報道ス中ニモ **ンアルコ** **ー博士内科** (殊ニ神經)

臨床講義

ハ譯者風山學士ノ健筆ニナリ簡潔流暢ナル言文一致体ニシンテ坐ロニ同博士ニ接スルノ思ヒアリ

リ又伊藤博士講述ノ **京都醫科大學外科臨床講義** ハ簡潔克ク其要ヲ得タリ又四月七日發行

行第千四百五十五號以下ニハ **第二回日本聯合醫學會總會** 及各分科講演筆記及景況ヲ連

揭セリ之ヲ通讀セバ坐ガテ講演ヲ聽クノ思ヒアリ▲半年分(二十六冊)前金郵稅共貳圓四拾八錢

東京市京橋區南小田原町四丁目五番地

發行所

東京醫事新誌局

The Adrenalin Family



高峯讓吉氏が發見製造に係るアドリナリンは其強度効力常に一定し時日を経過するも効力を失せず且つ其溶液は絶對的無菌性なる事を保證す。近來アドリナリンの聲價隆々たるより、歐米に於て模造品を製造販賣する者現れたり而かも是等は從來の有害性夾雜物多く且つ時日を経過すると共に効力を失する頗る不完全なる副腎越幾斯にして、到底アドリナリンの純良確實なるに匹敵す可きものに非ず、此等の不完全にして危険多き模造品を排し此の多數醫家の實驗を経て効力の顯著確實なるアドリナリンの安全なるに若かざるなり

▲一千倍溶液 一オンス入 半オンス入

▲アドリナリン吸入劑 一弓入

吸入劑 アドリナリン一分を千分の中性油中に溶和せるもの咽喉及鼻腔内の

▲アドリナリン軟膏 半弓入

軟膏 アドリナリン一分を千分の緩和なる膏油に溶せるもの粘膜の疾患特

▲アドリナリン坐藥 十二個人 六個人

一般坐藥と同一の形態に製せられ腔内及び直腸の疾患等に適す

▲アドリチリン錠 二十五錠入

一錠中〇、〇〇一を含むが故に蒸留水一瓦液に一錠を溶解すれば隨時新鮮なる千倍の溶液を得べし

消 化 新 藥

營 養 機 亢 進 は

疾 病 治 療 の 一 大 活 力 な り

消化不良を全治するのみならず、病的状態に於て營養機を増進する力ある「タカデアスターゼ」は現時疾病の大部分を占むる肺結核、神經衰弱、神經性消化不良、其他慢性諸疾患に際し常に併用せらるべき貴重の價値を有せる藥品たり

醫學博士栗本東明氏は肺結核に本劑を併用して卓效を收めたりと報告せられたり
若夫れ急性疾患の快復期に於て「タカデアスターゼ」の一大必要藥たるは、今更論ずるを要せざるなり

「タカデアスターゼ」は七瓦入、十四瓦入、廿八瓦入、半磅入の各種として各地藥舖にて販賣す必ず高峯氏「タカデアスターゼ」と御指定を乞ふ

製 造 者 デトロイト パークデビス製藥會社
任 者 ニューヨルク 高峰化學研究所



ドクトル富士川游校訂 帝國圖書館司書 太田爲三郎編

日本醫事雜誌索引

明治卅八年度分新刊

正價 金八拾錢

郵稅 四 錢

既刊

●明治三十二年度分

正價 金七拾錢
郵稅 金四 錢

●明治三十五年度分

正價 金七拾錢
○稅 金四 錢

●明治三十三年度分

正價 金六拾錢
○稅 金四 錢

●明治三十六年度分

正價 金八拾五錢
○稅 金六 錢

●明治三十四年度分

正價 金七拾錢
○稅 金四 錢

●明治三十七年度分

正價 金八拾錢
○稅 金四 錢

現時醫藥ニ關シ本邦ニ於テ發行セラル、所ノ雜誌ハ六十有餘種アリ、悉ク之ヲ購ハント欲スレバ月ニ數十金ヲ投ゼザルヘカラス加之ナラス之ヲ閱讀スルノ時間ハ業務ノ外ニ於テ到底求メ得ヘキモノニアラサルヲ信ス、然レモ我醫學ノ「リテラツール」ヲ知ラサルハ苟モ日新醫學ト共ニ馳驅シテ斯道ノ研鑽ニ熱心ナル士ノ最モ恥ツヘキ所也、本書坐右ニ在レハ既往七年間ノ「リテラツール」ハ一目ノ下ニ瞭然タルヘシ
尙一言ヲ特記スヘキハ本事業ハ同盟醫事雜誌各社ノ計畫ニ成リ弊舖發行ノ委囑ヲ受ケ、敢テ利益ヲ計ラサルノミナラス却テ多少ノ資金ヲ捐テ、聊カ斯道ノ爲ニ盡サントスルモノ也、希クハ各社ノ熱心ト弊舖ノ微衷ヲ容レラレシコトヲ

發賣所

東京市本郷區龍岡町卅四番地
(電話) 谷一六七二番

吐鳳堂書店

見本呈上

醫事新聞

毎月(二回十日、廿五日)發行
一冊郵税共金拾六錢

●敢テ自畫自賛セズ○見本ニ就テ其内容ヲ知悉セラレン
コトヲ乞フ○但毎月一回附録アリ目下心臟病ノ豫後ニ就
テ(ライデン述)ヲ譯載シ次デ心臟病ノ療法ニ及ブベシ

臨牀藥石新報

毎月一回(十五日)發行
一冊郵税共金拾錢五厘

●是亦見本ニ就テ其眞價ヲトセラレヨ○第十四號(本年七
月發行)ヨリハ方府欄中、肺結核(竹中學士述)ヲ連載セリ

以上兩種別々ニ
復はかき一葉ニテ兩種申込ハ御繼申候
往復はかきヲ以テ御申込アレハ直ニ送呈スヘシ○往

東京市本郷區彌生町三番地

同

醫事新聞社
藥石新報社

金澤醫學專門學校 十全會會則摘要 (明治三十八年 五月改正)

- 一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ縁放アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ縁放アル者ヲ贊助會員トス
- 本校職員卒業生及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス
- 一本會ニ講話部、雜誌部、學術實習部、遊技部、劍道部、柔道部及弓術部ノ七部ヲ置ク
- 一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス
- 本校職員タル特別會員(校内特別會員)ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スバキモノトス
- 本校卒業生タル特別會員(校外特別會員)ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金壹圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス
- 將來卒業ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ケ年間ノ會費金參圓ヲ納ムベシ
- 通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓五拾錢ヲ納ムベシ
- 特別會員ニシテ引續キ三ケ年間會費未納者ハ除名ノ上一般會員ニ通告ス
- 一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌年八月ニ終ル
- 一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講話會ヲ開ク
- 一講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クコトアリ
- 一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ
- 一雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス
- 一學術實習部ニ於テハ專ラ小野慈善院ノ患者ニ就キ診察治療ヲナシ學生ヲシテ臨床實習及調劑實習ヲサシム
- (運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス)

▲投稿心得七則▼

- 一投稿用紙は中折紙を用ゐる必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし
- 一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て没書とす
- 一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし
- 一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず
- 一未完の原稿は採録せず
- 一原稿採否の權は編輯長にあり
- 一一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治三十九年十月十五日印刷
 明治三十九年十月十九日發行

編輯兼發行者 石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地 森 島 彦 夫

印刷者 石川縣金澤市尾張町八十二番地 宇野孝太郎

印刷所 同所 活文堂

發行所 金澤醫學專門學校十全會

電話【六十五番】